

アレクサンドロス大王と希臘世界 (上)

井 上 智 勇

序

一八三三年今より正に百年前、古代より中世を通じて物語的な傳承の中に枉げ傳へられて來たアレクサンドロス大王の歴史を、資料の分析、批判とその近代的世界史的史觀による觀照によつて、科學的歴史に迄再認識せる最初の人がドロイゼン J. G. Droysen なるは周知の事實である。而して彼の著 Geschichte Alexanders des Grossen が尙勘考され是正さるべき點を多く含むに拘らず、アレクサンドロス大王及びそれ以後の所謂ヘレニズム文化研究の上に古典的典籍として不滅の榮光を放射する所以は、單に本書がアレクサンドロス大王に就て近代的歴史考察の先鞭を附したと云ふ點にのみ存するのではなく、却てそれに顯れて居るドロイゼンの右文化事象考察に於ける立場の正鵠さ銳さにあると考へられるのである。彼は本書の冒頭に「アレクザンデルてふ名は一の世界的時代の終極と他のその開始とを意味する」と云つて居るが、彼がこれによつて言はんとする所のものは、アレクサンドロスの東方遠征、世界帝國の建設によつて、從來歐亞の兩文化が、それ等を支へる世界の地理的分立

に應じて、相異なる形態をとり獨自の發展をなせしが、今やギリシア的マケドニア的東方的文化への統一的傾向への發展軌道の上に置かれたといふにある。¹⁾ ドロイゼン提唱にかゝる、東西兩文化の關係に關聯せしめるによつてアレクサンドロスの歴史的意義が正しく考竅さるべきことに就ては、彼以後輩出した數多のヘレニズ研究者の一樣に認める所である。併し乍ら此考察の中心となるその關係に就ては彼等が同一の意味に於てそれを考へたのでは決してない。ドロイゼン以後今日迄アレクサンドロス研究にとられ來りし立場は大要次の三種に分ち得る。

アレクサンドロスの東方遠征が希臘文化を最高調に達せしめたものとなし、アレクサンドロスに於て希臘的なるものゝ凝集せるを觀るとするがその一の立場であつて、アーベル Otto Abel モムゼン Theod. Mommsen ホルム A. Holm 等が之を代表する。²⁾ その二は是と全く正反對の立場、即ちアレクサンドロスを以て希臘文化の破壊者であり希臘世界を東方化したる者とするものであつて、フォン・グートシュミット、v. Gutschmidt グロート G. Grote 等に代表される。³⁾ 蓋し前者はアレクサンドロスの遠征によつて結果せる希臘的文化の地理的擴大に眩惑され、アレクサンドロスの精神には却て希臘精神に對して否定的なものあるを看過せるもの、量を見て質を知らざるものと云ふべく、後者はマイヤー Ed. Meyer も指摘せる如く古典希臘への情熱的憧憬を有する小主觀に禍された誤謬であつて、古典希臘主義者とも云ひ得べきデモステネス等の言説に傾聽すること餘りに深うして、アレクサンド

ロスによつて建設された世界帝國に擴大したる希臘文化の存在を無視したものである。かくてはローマ共和末期より帝政時代に互るローマ世界の文化又は初期キリスト教の發展等に對するヘレニズム文化の意義を理解することは不可能であらう。於是筆者はマイヤー、ビルト Theod. Birt、ウイルクエン U. Wilcken、ケールスト J. Kaerst 等が、個々の事實の解釋に就いては必ずしも一致せざる所あるも、アレクサンドロスを希臘文化の荷擔者又はその擴大者とすると共に東方文化の支持者なりとし、此意味に於て希臘文化の揚棄者となすを、前記二つの立場の誤謬より脱しアレクサンドロスの歴史的地位をより深く理解せるものと考へるのである。本論に於ける筆者亦此第三の立場に立つものである。

(註)

- (1) Droysen, Geschichte Alexanders des Grossen (Geschichte des Hellenismus Bd. I.)
 (2) Abel, Makedonien vor König Philipp. Leipzig 1847. S. 245
 Mommsen, Römische Geschichte V. S. 446, Holm, Griechische Geschichte III Berlin 1891. S. 426, 453.
 (3) Alfred v. Guutschmidt, Vorred zur „Forschungen zur Geschichte Alexanders des Grossen von J. Kaerst“ (S. Historische Zeitschrift Bd. 74. S. 2.)
 A. von Guutschmidt, Geschichte Irans und seiner Nachbarländer, Tübingen 1888. S. 13
 (4) Ed. Meyer, Kleine Schriften I Aufl. S. 285.
 (5) Theod. Birt, Alexander der Grosse Leipzig, 1925. U. Wilcken, Alexander der Grosse, Leipzig 1931.

我々は先づアレクサンドロスの世界帝國建設の出發點となつた希臘世界の、彼が出現する前の動向を一瞥し、それが彼の世界帝國建設に如何なる意義をもつかを顧念しなければならぬ。

前三五九年にその甥アミンタス Amyntas の後見人となつてよりマケドニア内部の統一平定に成功し、間もなく軍隊に擁せられてマケドニア王位に即いたピリッポス Philippos 二世は、騎兵の改編、歩兵の改良、攻城具の使用、幼時人質としてテーバイ在住の間に親しく見學したエバメイノンダス Epameinondas の斜線陣法の採用等、精銳なる軍隊と巧妙なる戦法とによつて、前三五八年には先づアムビポリス Amphipolis 同三五七年にピドナ Pydna 等の希臘植民地を掌握し、更に、前三六四年以來アテナイの領有せしポタイダイア Potidaia を占領して造船用材・鐵等の所産豊富なるカルキダイケ Chalcidice 半島に不拔の勢力を植ゑ海上への勢力伸張の根據地を獲、尙進んでクレミデス Kremidas を陥れトラキアの金鑛發掘の實權を握り國勢愈々強大ならんとした。かくの如きマケドニアの發展擴大に對して、前三五七年より三五五年に亙る所謂同盟戦争の結果ロードス Rhodos コス Kos キオス Chios カリア Karia 等エーゲ海上の盟邦を失ひその海上支配權を失墜したアテナイ始め希臘諸國は極めて無力にして、遂に前三三八年のカイロネイア Chaironeia の戦を最後の抗争として、スバルタを除く全希臘がマケドニアの勢力下に立ち、¹⁾「光榮ある支配權と自由との最後の日」²⁾を招いたのである。此希臘の敗北の根據は、マケドニアの軍隊の精銳なるピリッポスの戰略の巧妙なるとに存する³⁾

は云ふ迄もないが、我々は尙之を希臘内部の情勢そのものに於て見なければならぬ。

前三八〇年 Panyrikos を著し、それに於てペルシアに對して希臘人全體が共同戦線をしくべきを云ひ、その爲には先づ全希臘人が統一さるべきが不可欠なるを説き、その統一的希臘の盟主たるべきは「純粹なる希臘人の血を維持するが故に希臘全體の保母とも祖國とも母とも呼ばるべき、歐亞の兩天地に數多の植民都市を建設せる、法律・藝術・哲學の生みの親たる、又トロイ戦争前に既に希臘全土の指導者たりし」アテナイなりと主張し、祖國アテナイの文化と力とに輝きし昔の幻影を描ききつゝ、その過去の歴史の故に、今も尙頼むべき所多しとしたイソクラテース Isokrates は、かの同盟戦争直後(前三五五年又は三五四年⁶⁾)にもした Areopagitikos に於ては、幸福の來る所そは最大最美の城壁に圍繞された都市ではなく、現實の社會情勢を觀取しその上に勘考された最善の政治機構の存在する國家であるとして、パネグリュコス⁷⁾を著した時代の幻影を追ふロマンティックな思考を捨て、現實を省察し、多數の盟邦を失ひ昔日の勢なきアテナイの救済を問題とした。此時彼の見出したアテナイ救済の唯一の方法は、ソロン Solon クレイステネス Kleisthenes 時代の總ての市民が安定せる生活を享受せし善き民主政治の復興あるのみとした。⁸⁾ 時局救済の爲になされたこの提案がよしイソクラテース一人の思惟によるとしても、彼をしてかく考へしめた「幾何かでも財力を有する市民より、全く無財の市民が遙に多數であり、隨つて彼等が國家を憂へず只管に今日の生活についてのみ思ふもそれは寛恕さ

れねばならない現在の「アテナイ」の實情——又その故に「軍事も等閑に附せられ、緩急の際も、給金が支拂はれる限りに於てのみ従順な紙製兵士ともいふべき傭兵に頼らねばならないアテナイ」の姿は儼然たる事實であつた。而してそれは單にアテナイのみの姿ではなかつた。外にはポーリスとポーリスとの不斷の抗争あつて國力相互に消滅し、内には富める者は増々大となり貧者は愈々困窮し、浮浪の民・野盜・海賊・傭兵となつて國を捨て、他國に出る者は愈々増加した。感性的逸樂に耽る富者の一團、食を求めて國を去る貧者の群、これが前四世紀の希臘世界一般の姿であつた。インクラテースがピリッポスに向つてペルシア討伐を慫慂する際に、「今や希臘に於ては安住せる市民より集め得る兵士より、よりよき且より多くの兵士を、家を失ひ流浪する者共より糾合し得る」と言ひ、又「今や應にペルシアを討つべき秋である。これによつて貧困者も富を獲その慘況より逃れ得るであらう。……凡そ人間は本來種々なる難苦に重壓されて居る。而も我々は鬪争・不安を自ら起し、この爲我々のうち或者は横死を遂げ、多數の者は食のためにやむなく敵國の傭兵となり、昔の友と鉾を交へねばならない有様である」と言へるもよく這般の消息を物語るものである。

市民大衆を指導すべき地位にある上層階級の多くも感性的悅樂に耽り唯瞬間をのみ思ふて深く將來を顧慮せず、政治は愚人の手に弄ばれて、前世紀に於てはあらゆる文化的部門の中心であつたアテナイさへも、今は「住みがたきポーリス πολὺς ἀνοικητός」¹³⁾「やがてはこゝに人間と神の復讐 τὰς τιμὰς

τῶν ἑβραίων καὶ τὰς παρὰ τοῦ θεοῦ τυραχίας が来るであらう¹⁶⁾と呪咀にも似た感情を以て觀られる都市となつたのである。

實に前四世紀の希臘人の動きは實生活そのものに於てポリスからの分離の傾向を示すのである。アレクサンドロスの帝國を Reich von Weltbürgern <レニズム>を Weltbürgerthum とする立場が認められるならば、この希臘大衆の動きは正にアレクサンドロス帝國成立の一礎石であり、希臘的精神からレニズム的なるものへの傾向を實踐によつて表明するものと言はるべきではなからうか。

(註)

(1) Isokrates, Areopagitikos 4.

Aischyros, On the Assembly 70 によれば失はれた同盟都市の数は七五、同書七一節によれば、失はれた三層艦船の数は一五〇、傭兵に支拂はれた金額は千五〇〇タレントで而もその傭兵たるや全希臘から狩集められた無賴漢、又は海濱生活者や商船を襲撃するを常とした海賊であつた。「かくて、アテナイはヘラスの尊敬と覇權との代りにミュコナンソス Μυκόννος (テッサリアの海岸に近き島で當時海賊の根據地となつて居た) の海賊の巢窟といふ悪評を得た」

W. Onken, Die Staatslehre des Aristoteles II Hälfte 1875. S. 202 には前四世紀の上半分の希臘の内争紛亂による國力の疲弊と武力の失墜を強調し、當時の希臘はヒリツボスの軍國主義的王國に對立するには餘りにも無力であつた、前三七七年のアムビポリスの喪失は前三三八年秋のカイロネイアの敗戦の前兆であつたと云つて居る。

U. Wilcken, Alexander der Grosse, Leipzig 1931. S. 19ff.

(2) Justinus, 9, 3.

(3) Isokrates, Philipp. 6.

(4) Isokr., Paneg. 2.

Georg Basolt, Griechische Staatskunde I. Hälfte, München 1920. S. 87.

(5) Isokr., Paneg. 3. 4. 9. 10. 13. 15.

(6) Basolt, *ibid.*

(7) Isokr., Areopagitikos 5.

(8) ”, Areopag., 5. 38.

(9) Isokr., Areopag., 38.

”, Symmach., 121. 41.

(10) Isokr., Areopag. 4. 38. イソクラテスは同盟戦争の時の傭兵の費用は一〇〇〇タレントであつたと記して居る。これはア
イスキネスの記述(註(一)参照)とは五〇〇タレントの開きがあるが、その何れがより正確なるかは筆者未だ知らず。

Demosthenes, Philippika I. 19. こは一萬二萬の傭兵ありとも、それは紙製の兵士に過ぎぬ云々とあり、同書第二十三節に
彼はアテナイ市民自ら國防の第一線に立たんことを要望し、アテナイの軍隊がコリントスと同様に殆んど全部傭兵より
構成されて居ることの不可なるを説き、彼等傭兵が従順なるは給金が支拂はれる間のみであると言つて居る。

(11) Isokr., Philippika 40.

(12) ”, Panegyrikos 44. vgl. Areopag. 38.

(13) ”, Symmach., 121. Mahnrede 27 f. 31.

(14) ”, Symmach. 41. vgl. 49.

(15) ”, Antidosis 22.

(16) ”, Symmach., 120.

(17) Theod. Birt, Alexander der Grosse, Leipzig 1925. Einleitung.

二

我々は前節に於て、前四世紀の希臘の庶民の動向そのものに希臘的生活の根底であるポリスを破り、ヘレニズム的生活に轉向すべき萌芽あるを觀たのであるが、此希臘の現實生活を批判しそれを否定し救済を望む當時の思想家・政論家の所説に就ては如何に考へられるであらうか。

前四世紀の上半分に幾多の學的業績を残したプラトーン Platon の論説、特にその國家篇にあらはれてゐる所のものに就いて先づ考究すべきものがある。勿論彼は紀元前五世紀の希臘啓蒙期に輩出した所謂ソピステースの個人主義、相對主義と異り、善其者・美其者・正義其者、即ち可變的事物の中にある不變のイデア *Ideas* 又はエイドス *eidos* を探究し、永久不變唯一絕對の存在 オン を求めたのである。¹⁾ 此故にこそプラトーンの論説は今も尙知の絕對的根底たるべき哲學の源泉たり得るのである。彼の國家篇に思惟されて居る理想國家も、主として「何時、又、如何にして實現され得るかといふ疑問から離れ、たゞ然あるべきを考究せん²⁾」とする純理想主義的思惟の所産であつた。隨つてそこに見られる一言一句の理解も、少くともそれをプラトーンの意味に於て理解せんとする者には、彼の哲學全體との關聯に於いて、又は哲學史的立場より觀らるべきことが要求せられるであらう。乍併このことは未だ哲學を知らずプラトーンを知らざる筆者のよくする所ではない。こゝにてはその國家篇に顯現せる彼の國家思想が如何に當代希臘世界の動きと關聯するかが省察され、ば足りる。

プラトーンの國家思想の最も直截にあらはれて居るは彼の國家篇 Πολιτικά 第五卷より第九卷に至る對話である。

經驗される國家形態は、之を名譽の支配 τιμοκρατία 少數の有力者の支配 ἀνταρχία 一般庶民の支配 δημοκρατία 個人の暴力的支配 τυραννίς の四種類に分たれる。それ等は名譽・欲望・無教養・個人的利益又は權力に左右され、何れも國家全體の「善」を目標とするものに非ざるが故に³⁾凡て非難され排斥されねばならぬ。然らば如何なる人に統治される時完全なる國家となるか、それは哲學者に統治される時である。かくて國家篇第五卷第四七四節より第六卷に亙つてプラトーンは哲學者の意義とその性格に就いて論じ、彼が國家統治に適任する所以を説明し、第九卷に於ては理想國實現の爲に哲學者の立つはむしろその義務であると論じて居る。即彼は曰く、哲學者とは「愛知 φιλοσοφία」のバトスに充せられた者であり、その「愛する φιλία」の對象たるソピアは可變的的感覺的事實、經驗的な雜多な事實に就いての思考 σοφία ではなくして、あらゆる事象の中に常に自己を包藏せしめて居る絶對的な眞の「存在 ὄν」の眞知 γνῶσις である。⁴⁾かくの如き哲學者は、虚偽を許さず、眞理を愛し、魂の喜びに従つて感覺的悅樂を排し、寛宏にして死を恐れず、謙讓にして傲慢ならざる者である。⁵⁾かくの如き性質を有する者が教育と年齢によつて圓熟の域に達した時、我々は彼に國家を託し得るのである。⁶⁾かく論じ來つてプラトーンはその國家論の結論とも觀らるべき、「哲學者が君主となるか、或は現に存する王、或は主

權者が眞に且正しく哲學する者となり、政權と哲學とが統一され、他を排斥することに汲々たる俗物が全く斥けられるに非ずんば、國家の、否私は信する、人類一般の不幸が終熄することはないであらう。我々が論じ來つた理想國もその時迄は成立の可能性を得て白日を仰ぐことはないであらう⁷⁾といふ啓蒙君主國家思想を強調したのである。

我々はプラトンがその哲學によつて當代國民の一面的政治的立場を遙に揚棄し、それによつて國家に絶對的意義を附與せんとして居るに於て古代希臘精神に呼應するを觀る⁸⁾。又彼の理想國家の制度が決して一部の國民の幸福を目指すものでなく國民全體の幸福を思ふものでなければならぬ⁹⁾とするに於て、或はその國家にあつて被統治者の立場にある希臘人が、主權者に對して奴隸的であると當時の希臘人に考へられてゐたベルシア人から區別されてゐるに於て、プラトンの思想には平等・自由尊重の傳統的希臘精神の強く働くを觀得るのである。併し乍ら統治者として、希臘民主主義の極力排撃して來た君主或は王の存在を認容して居ることは假令その性格を峻嚴に民主主義的精神から限定して居るとは云へ、希臘精神を揚棄したものと云はねばならない。

プラトンの理想とした國家形態が彼の理想主義的哲學の論理的歸結なるは疑なき所である。併し彼の思想發展を單に論理の所産、内至靜觀的思惟の結果とのみすることは又彼の全體的理解ではないであらう。デアアローグの高調に達するや何人も啓蒙せずばやまない熱烈な糾問的質問の連投、現行社

會機構の餘りにも理想形態と隔絶せるを歎じ義憤に燃えて居る所、總じて彼の現在社會に對する否定的態度の強きをみる者は、彼が却てそれだけ強く現在に關心するを知るであらう。プラトンが希臘の民主主義から一步踏み出して、尙限定的にはあるが、君主制を認容してゐるのもデモクラシーの上に立つ現實の不安な世相、幸福なき現世社會に對する排撃的態度と分離しては充分に理解することは出来ないのである。このことはクセノフォン Xenophon アリストテレス Aristoteles イソクラテース等當代の諸思想家の王制認容思想、乃至は何らか強大なる權力所有者の出現を要望する精神の根底に通ずるものである。

クセノフォンはその著 *Kyropaidia* 八卷に於て、ペルシア王キロス *Kyros* の受けたる教育、その勝利に輝く遠征・討伐、文武兩方面における人民の訓育等を敘述し、キロスを以て卓越せる知者・理想的君主として描出し、かゝる君主に統治され導かれる時その國民は幸福であり繁榮すると希臘人に教へて居るのである。勿論「法律の前には平等の權利」「言論自由の誇るべき平等」¹²⁾等を内容とするこの理想化されたペルシアの王制は、具體的にはアテナイの民主主義的思想が異質的な東方の君主國に移されそれを色採つて居ると考へられるであらう。併し乍ら「我々は人が人を支配することは他の如何なる動物を統禦するよりも困難であると考へ勝ちであつた。がかのペルシア王キロスが巨多の人民、幾多の都市、幾多の國を服屬せしめたるを思ふ時、我々は我々の思考の變更を餘儀なくされる。即我々

は今や斷言せざるを得ない——若し、一人あつて眞の知識を以て統治するならば、人を支配することも決して不可能でもなく困難でもない、と。」¹³⁾と云つたクセノプオンの王政謳歌の意識にも秩序なき希臘世界の反影を見るであらう。

哲學史上プラトーンと同じ流れの上にもられるアリストテレスも、「王國は正しき者を衆愚より救ふ防禦物」¹⁴⁾としたが此處にあつても論理以外に、衆愚に乱された現實社會の否定が底にあると考へられるのである。

曩に述べたる如く、イソクラテースも亦誰よりも熱心にポリスとポリスとの無益有害なる争闘を非難し、經濟的には貧富の差の大なる爲に、政治的にはそのことに照應するデモクラシーとアリストクラシーとの思想的對立の激さの爲に崩れ行くポリス社會を憂慮しその救濟手段を考究した。腐敗し盡した希臘的民主政治には最早自力更生の力なしと知つた時、そのはじめ傳統的民主主義精神を鼓吹してゐた彼も亦、全國民が一個人の下に統制され安靜平和が維持さるべき王制國家を憧憬せざるを得なかつた。我々は彼のかくの如き思想の變化が前三八〇年の著 *Panegyrikos* と六年後の著書 *Nikoiakos* とに驚くばかり明瞭にあらはれて居るをみるのである。即ちバネギリコス第一二五節には、マケドニア王アミンタス *Amintus* 及びシラクサの僭主ディオニシオス *Dionysios* と同盟せしスバル¹⁵⁾タを、そが自由なる希臘諸國に挑戦しそこに君主政治を樹立せんとするものとして攻撃し、同書第一五

節以下にはペルシアが希臘に敗れた要因は君主政治下のペルシア人の卑屈な精神、怯懦、奴隸根性に在るとした。こゝには君主政治に對する嫌忌と自由なる民主政治下の希臘を謳歌する精神とが見られる。然るにニコクレス第二章第三節には「ペルシアの大なる所以は何よりもペルシア人が王權を尊重するにあり、シラクサが希臘人國家中の最強國となりしは僭主ディオニシオスの專制政治の賜物である」と言ひ、六年前の精神とは全く正反對の思想を表現してゐるのである。勿論彼の求めて居る王は國民全體の福祉を政治の目的とする者、プラトーンやアリストテレースによつて説かれる啓蒙君主又は社會主義的君主であつて、その精神は *Idee des sozialen Königthums* ¹⁶⁾ と云はるべきものであつた。即ち彼のプラトンのないデアとして望んで居る王國は、オリエント的な、王と臣下とが截然と區別され、臣下が王に於てあるとは異なり、王の性格が國民生活を基礎として規定され彼がむしろ國民に於てあると考へられる所のものである。此意味に於てはイソクラテースの思想は尙希臘思想の流の上にあると云はれねばならないであらう。而も遂に彼をしてピリッポスの希臘全土の總帥たらんことを切望するに至らしめた現實希臘の無力なる諸國家、諸國民に對する信頼の念の消滅は、又彼をして凡そ希臘民主主義を超えた王國讚美をなすに到らしめたのである。

右の如く考察し來るとき、我々は、ペールマンがイソクラテースの歴史的地位に就いて言つた次の言葉を、單にイソクラテースのみならず、右の諸思想家全體について言はるべきを思ふのである。即ち

一、ポリスの政治

In der Art und Weise, wie die Decadance der republikanischen Polis und des freien Volkstaates in seinen Schriften sich reflektiert, kommt es uns eigentlich erst zum vollen Bewusstsein, welchen Anteil dieser einflussreiche Lehrer der Politik und „Stimmführer der Gebildeten“ an dem Übergang vom hellenischen Stadtstaatsrepublikanismus zur hellenistischen Monarchie, von der Polis und der Stadtstaatskultur zur hellenistischen Weltkultur gehabt hat.

170

(註)

- (1) Ed. Zeller, Die Philosophie der Griechen II Teil I Abt. 4. Aufl. Leipzig 1889, S. 613 ff.
- (2) Repub. V. 472.
- (3) ibid. VIII. 544—546.
- (4) ibid. V. 475 ff. VI. 485.
- (5) ibid. VI. 484—486.
- (6) ibid. VI. 485.
- (7) ibid. V. 473. vgl. VI. 485.
- (8) Zeller, a. a. O. S. 894.
- (9) Repub. IV. 420—421, VI. 500, VII. 519.

- (10) *ibid.* V. 463.
- (11) *ibid.* V. 464 f. 469 ff. 471. VI. 493.
- (12) Xenophon, *Kyropaidia* I. iii, 18. 10.
- (13) I. i. 3.
- (14) *Arist. Politik.* V. 10. 1310 b.
- (15) *Isokr.*, *Panegyrikos* 41. 47. 48.
- (16) *Isokr.*, *Mahnrede* 15.
- Pöhlmann*, a. a. O. S. 90.
- (17) *Pöhlmann*, a. a. O. S. 3f.

三

ポリリス的民主主義的思想からヘレニズム的世界主義的、王制的思想への過渡的流の上に前四世紀の希臘がみられる時、我々は尙當代に於ても特殊な思想を以てこの流の中に現はれて居る二人の思想家、アンテイステネース *Antisthenes* とその衣鉢をつぐディオゲネース *Diogenes* とに注目しなければならぬ。前者は所謂大儒派^{キユニ}哲學^{スモス}の開祖であり後者はその弘布者である。兩者の著書は共に相當の數に上りしならんも今はその完全に殘るものもなく、僅かに他の古代著述家の書中にその片言隻辭が遺るのみである。而して我々が今それ等の片言隻辭を一括して見得るのは十九世末編纂されし『希臘哲學斷片集 *Fragmenta Philosophorum Graecorum*, Paris 1881 von Fr. Gull. Aug. Müller (F. Ph.

〔C〕』によるのである。こゝに見られるものは文字通り斷片の彙纂であるが、それ等の底に流れて居る彼等の思想を窺ふことは必ずしも不可能ではない。

先づ、アンティステネースの理想生活は如何なるものであつたか、

アンティステネースはその著ヘラクレスの中に曰く、徳に從ふ生活が目的であるとは彼等（ヘラクレス及ペルシア王キロス——アンティステネースの尊敬せる者¹⁾）の認める所であると、
ipeékei δ' αὐτοῖς καὶ τέλος εἶναι το κατ' ἀρετὴν εἶναι, ὡς Ἀντιοθέου's φησὶν ἐν τῷ Ἑρακλεῖ. (fr. 1.;

Diogenes Laertius VI. 104.)

則徳の生活——これが彼にとつては一切であつて、その徳に於ける生活とは彼にあつては、萬人本有のよき魂に從ふ所のものであつた。此生活のみが善なるそれであつて、富、名譽、身分、親族、家族、友、會話、通常の生活法、勉學等凡そ現實的社會的存在物は盡く善なるものから除外され排斥された。²⁾ (*φιλάνθρωπος οὐδεὶς ἀγαθός, οὔτε βασιλεὺς, οὔτε ἐλεύθερος. κτήνας οὐκ εἰμὴ συγγενεὶς, δίκαιον, φίλον, φίλην, συνήθεος τόμοι, διατριβή, πάντα ταῦτα ὅτι ἄλλότρια.*)⁴⁾ 此れ等一切の現實的社會的存在から解放されて始めて眞の自由があり幸福がある。⁵⁾ 此境地に到達するに必要なものは唯ソークラテース的な強さ *Σωκρατικὴν ἰσχύς* (fr. 58) を以てせる省察の練習 *Χρηστικὴν γυμνασίαν* (fr. 75) のみである。かくして彼は「賢者は自律自足的なり *αὐτάρκτην τε εἶναι τοῦ σοφοῦ*……」⁶⁾ と言つたのである。

かくの如く倫理的善の生活を求め、その源を人間本來の魂にのみ見出して自然主義的、個人主義的思想家となり文化成立の物的基礎を忌避し文化そのものをも斥けたアンティステネースが現行行政組織に對しても否定的であつたことは當然であつた。

或人がアンティステネースに尋ねた。

『政治にたづさわるのはどの程度にすればよろしゅう御座いませうか』

アンティステネースは答へた。

『政治……あれはまあ火のやうなものですよ、餘り近づかないやうにしなさい、火傷しますからね……』

だが、餘り遠去くと凍えますよ』

Ἄντισθένης ἐπαρτήεις, πῶς αὖ τις προσῆθαι πολυτελείᾳ, εἴτε, καθύπερ τιππὶ, μήτε λαν ἐγγύς, ἢ αὖ μή καὶς μήτε πόρρω, ἢ αὖ μὴ πύγῳός.⁽¹⁾

又、

賢者は現行法によつて政治を行はず、却つて徳則によつて之をなす Ἡρεσκε αὐτῶ καὶ τῶδε …
καὶ τοῦ σοφοῦ οὐ κατὰ τοὺς κελεύουσ νόμους πολυτελεσθῆαι ἀλλὰ κατὰ τοῦ τῆς ἀρετῆς.⁽²⁾

此等の断片的思想表現よりみても、彼が則徳の生活を最高のものとし現在の國家生活をその理想よ

り離れたものとせるは明である。彼が「戦争は貧者を解放するものに非ず、富者を作るものなり」⁹⁾との意を述べた時、それは彼に於ては、恐らく一應は考へられるであらう所の階級意識の強調ではない。物質的なものを一切排斥非難した彼にあつては、むしろ徳アレテーより離れし文化形體の一たる國家活動の一として戦争が否定されて居るのである。彼の攻撃の目標は言葉にあらはれた戦争ではなく、その背後の國家であつた。¹⁰⁾ 随つて「ソクラテース的な強さ以外には何も必要としない徳によつてのみ幸福は得られる、此故に良家エウゲネースの子弟エテレーテスも混血兒も同じである。'Arteklepue tous autous euryveis tous kai eutapē-tous autōpōn vāp tñv āperñv eīvai ppos eūdaimonīan, jngēvous pporōseōmēnñv ōtu jñ Zōkpartuēis ioxūs。」¹¹⁾

と主張した彼の前には國家の對立、民族的區別等は存在しない。彼に於てある人間區分原理は唯徳のみであつたのである。換言すれば彼は最早如何なる國にも屬しない世界市民 Wehlinger であつたのである。¹²⁾ 此意味に於て彼は亦ヘレニズム文化潮流の上に立つと云ふべきである。

アンティステネースの思想を繼承しその主義の徹底的實踐者となり、身に襤褸を纏ひ、アテナイ、コリントス等の巷間に流浪して一般大衆にその思想を傳へた者は實にシノーベの人ディオゲネースであつた。

ディオゲネース曰く、徳は富める國にも家にも住ひ得ず、と。

Διογένης ἐθελε μῆτε ἐν πόνει πλουσίῳ μῆτε ἐν οἰκίῳ ἀπερῆν οἰκεῖν δύνανθαι.¹³⁾

人あり、ディオゲネースに問ふて曰く、「誰をか之を貴紳といふ」と。答へて曰く、「富・名聲・快樂・生命を輕蔑し、其對者即ち貧窮・不評・勞苦・死を超越するを謂ふ」と。

Διογένης, πυνθαουμένου τινός, τίνες τῶν ἀνθρώπων εὐγενέστατοι Οἱ καταργουῦντες, εἴπε, πλούτου, δόξης, ἡδονῆς, ἰσχύος, τῶν δὲ ἐναντίων ὑπεράνω ὄντες, πεινίας, ἀδοξίας, πόνου, θανάτου ¹⁴⁾

彼曰く、運命には勇氣が、法律には自然が、感情には理性が對立す、と。

Ἐργασκεν ἑαυτὸθὲναι τύχη μὲν θύρατος, νόμος δὲ φύσιν, πάθει δὲ λόγῳ. ¹⁵⁾

此等の斷片的な主張によつて知られる如く彼の思惟せし理想的人間は、現に存する總ての社會的秩序を越え、人間本有の善なる性質に遵ひ、それに適從することによつてのみ眞に崇高なる人となるべきを信じ他の超越的な力を飽く迄排除する所の人間であつた。彼自身が家もなく、國も捨て、一日過ぐれば以て足れりとしたのも右の如き信念によると云はれねばならない。「予は世界市民なり」*Ἐργατηθεὶς, πῶθεν εἶη, κοσμοπολίτης, ἔφη.* ¹⁷⁾「人間到る所青山あり」*Ἐλθενεὺς ὁ Διογένης, ὅτι αὐτὸ μὲν κύβες αὐτοῦ σπαρτάξωσιν, ἴστικαὶα ἔσται ἡ ταφή, αὐτὸ δὲ γύμνος ἀπτανῶνται, Ἰδουκῆ.* ¹⁸⁾とは正に彼の信念であり體驗であつたのである。

右の如きキュニスモスの反文化的自然主義的世界觀は窮局に於てアレクサンドロスの建設せる世界帝國の如き尙組織的な、その意味に於て文化的有限定的世界國家と相容れざるものであり、隨つてそ

れ自身直接にアレクサンドロスの世帝國の哲學的根據となつたとは言ひ得ない¹⁹⁾。併し乍らキュニヌモスに包藏する超國家的、超民族的精神要素にその世界主義は、ヘレニズム的精神である。

かの人口に膾炙せる桶の中に横つて居たディオゲネースとアレクサンドロスとの對話の事實性に就いて斷言することは、筆者は今暫らく之を保留するも、アレクサンドロスに従軍せる有力なる幕僚の一人オネシクリトス Onesikritos がディオゲネースに私淑せし人であつたことより見て、彼を通じてディオゲネース的精神のアレクサンドロス初めその從軍者の間に或程度弘通せしことは考へられる。

又彼の永眠の地コリントス市は彼の爲に犬の像に飾られた大理石の墓石を建て、その生都シノーペ市も後に彼の爲の記念碑を建立した²³⁾。此等の事實及後に在シノーペ市の記念碑に銘記されし碑文（註二三參照）より我々は希臘世界に於けるディオゲネース的世界精神の感化・擴大を觀得る。此故に希臘的ポリリス的小國家主義崩壞の上にキュニヌモスも亦その促進力であつたと云はねばならない。

要するにキュニヌモスはその主義自體が非希臘的にして寧ろヘレニズム的なるに於て、前四世紀のポリリスの希臘精神よりヘレニズムへの過渡的潮流に立つと共に、その感化の點に就いて言へばその過渡的潮流の促進者となりしに歴史的な意義を有するとすべきである。

（註）

(1) Fr. 12.

- (2) fr. 33.
- (3) fr. 86.
- (4) fr. 75.
- (5) fr. 75, 58.
- (6) fr. 56.
- (7) fr. 89.
- (8) fr. 58.
- (9) fr. 91.
- (10) W. Nestle, Die Sokratischer Jena 1922, S. 15.
- (11) fr. 58.
- (12) Nestle, a. a. O.
- (13) fr. 63.
- (14) fr. 61.
- (15) fr. 113.
- (16) fr. 112. Δοξίμης ὁ Διονυσίου's συνέχων ἐπιλάγειν πρὸ αὐτοῦ, ἔτι τὰς ἐκ προαιδέας ἡμῶν αἰτίας ἐπιλάγει καὶ ἐπινοούμεναι, εἴνα γὰρ
 αἰτίας, ἰσότης, παρὰ τοῦ ἐπινοούμενου, παροχὴς, εὐσεβείαν, βίον ἔχων ἐπινοούμενον.
- (17) fr. 322.
- (18) fr. 76.
- (19) U. Wilcken, Alexander der Grosse Leipzig 1931, S. 10.
- (20) Natop. v. Pauly-Wissowa, Real-Encyclopidie der classischen Altertumswissenschaft fr. Neue Bearbeitung V. 1. Stuttgart

生活一般に對して否定的であるに比し後者が現實の國家生活に否定的であつても國家生活一般を否定したのでない點に相違する所がある。併しその立場は相違しても現行社會機構を否定する限りに於ては共通點を有し、且その主張は程度の差はあれ共に非希臘的思想を包藏するのである。

希臘人救濟の爲に、右の如き新しい精神が一般思想界に擴大したが、それは單に一般思想界についてのみの事實であつただらうか。當時の一般庶民の精神は如何なるものであつたか、このことに就いては既に第一節に於て觸れる所があつたが、筆者は尙之を明にする爲にデモステネースの思想、その叫びを尋ねんとする。それはデモステネース的精神に投影する當時の一般庶民の姿それ自身が彼等の精神の反影であるからである。

デモステネースの運動を終始一貫する精神は「法は諸君によつて力を得、諸君は法によつて力を得る *oikeion oi νόμοι θ' υμῶν εἴτερον ἰσχυροὶ καὶ ὑμεῖς τοῖς νόμοις*」¹⁾法の唯一の正しき且堅固なる防禦物は何であるか、それは諸君大衆である。*τίς οὖν μὴν πυνάκην καὶ δικάλια καὶ βίβλας τῶν νόμων; ὑμεῖς οὐ νόμοι*²⁾等によつて知られる如く、民主主義精神であつた。それはシェーファー Arnold Schäfer 流に言へば *Vorliebe für Herkommen und Verfassung seiner Vaterstadt* ³⁾であり、ケールスト的⁴⁾に言ふならば、それは常にデモステネース一個の信念にとゞまらず、自由主義的希臘思想が長き歴史を通じて保持して來た確信でもあつた。⁴⁾デモステネースが、一般民衆のこの確信を自覺するによつて國家はオリ

ガルキア及テュランニスから安泰であり、新興の蠻國マケドニアよりヘラスは安全たり得るとしたの⁵⁾は當然であつた。アムビポリスを犠牲にしても尙ピリッポスと妥協せんとするアイスキネース、*Chynes* を攻撃して「ピリッポスの懐柔政策との妥協は畢竟ヘラスの自由喪失であり、マケドニアの前にヘラスが懼伏することに他ならない。平和の爲てふ口實の下にマケドニアと協調せんとする者はピリッポスの保證人 *εγγυητής φιλάνθρωπος* であつてヘラスの利益を代表するものではない」との意を表明したるも⁶⁾彼が傳統的希臘精神の上に立ち、強固なる國家主義者たりしを示すものである。

前三三八年テーバイの陥落に驚愕して、同運命に陥らんことを恐れたアテナイがその城壁の修理を急いだ時、自らその工事監督者となり、進んで自己の財囊より一〇〇ムナ（約七八六〇マルク）を寄進して豫定以上の事業を完成したのはデモステネースであつた。⁷⁾三三六年ピリッポスがその臣パウサニオス *Pausanios* の刃に倒るとの報アテナイに達するや、雀躍して、パウサニオスの爲に社祠を建立し、神々に感謝の供犠をなさしめた者もデモステネースであつた。⁸⁾又この時アテナイを指導し、アレクサンドロスの義母クレオパトラの父にしてマケドニア王位を窺ふアッタロス (*Attalos*……曩にピリッポスの命により小亞遠征の途に上り、當時尙小亞にあり)と氣脈を通じて、反アレクサンドロス運動を起さんとしたのもデモステネースであつた。⁹⁾デモステネースがペルシア王より三〇〇タレント（約一三五萬マルク）を受けたと稱せられたのは此時である。¹⁰⁾三三五年の夏、その都市國家の自由を恢復せ

んとして、「男子は擧げて城壁を守り、槍は折れ果て、身は數箇の瘡癩に苦しみ、氣息奄々として幽明將に分たんとするも、敵來らば尙立つて之に抗せんとす。落城せしテーバイの街——拉し去られ行く婦女子の數々……母は子を呼び、子は母を求む……血は流れて川をなし、屍は積んで山をなす。此慘狀——見る者誰か泣かざらん、¹¹⁾」と一古典史家ディオドロスをしてその熱烈なる愛國心と悲惨なる落城とに泣かしたかのテーバイの最後の奮戦の背後にも、亦デモステネースの示唆があつたのである。¹²⁾此等の運動を一貫するは、マケドニアの前に飽く迄へラス世界全體のポーリス的自由を確保せんとするデモステネースの不動の精神であつた。

當時の希臘世界はピリッポスに對して對立・友好・屈服その何れかの關係に於て立たねばならない情勢にあつた。隨つてピリッポスに對して如何なる關係に立つべきを主張したかを觀るによつてその主張者の立場を一層明確ならしめることが出来るであらう。此意味に於てこゝに筆者は、その主張に對立的なものがあるイソクラテースとデモステネースとの對ピリッポス精神を一瞥することの必要なるを思ふのである。

イソクラテースが此問題についての主張を最も明瞭にせるは前三四六年の *Philippika* に於てである。主としてこれに據つてその精神を檢察するに、曰く、「我々(希臘人)は今やペルシアを討伐すべきである。¹³⁾何故ならば我々はかの(B.C.三八六年の)アンタルキダス平和條約以來ペルシアの奴隸となつ

てゐる、實にこの條約は我々にとつて協定はでなくして命令である。¹⁴⁾ 昨今ペルシア王アルタクセルクセス三世オロス Artaxerxes III Ochus はその父アルタクセルクセス二世ムネモン Artaxerxes II Mnemon の如き勢力なく、¹⁵⁾ 埃及、キプロス、フェニキア、キリキア、カリヤ等に於ては昔日の統禦力を失つてゐる。¹⁶⁾ 今こそペルシアを討つべき時である。是に成功せんか莫大なる富と廣大なる領土とを得、¹⁷⁾ 以て衣食を失ひ或は妻子を伴ふて流浪し、或は他國の傭兵とならざるを得ない一般希臘人をその苦境より救助し得るであらう。¹⁸⁾ 併し願て希臘内部をみるに、希臘諸都市の上に統制力を分掌して居る四大國、スバルタ、アルゴス、テーバイ、アテナイ等は各々對立して常に最優位に立たんことに汲々たる有様である。¹⁹⁾ 希臘全土の疲弊の由つて來る所又こゝにある。²⁰⁾ 故に希臘諸都市を糾合してペルシア遠征を企圖することこそ希臘を救ふ所以である。然るにかゝる宏莫を遂行し得る如き人物も國家も希臘には存在しない。²¹⁾ 幸ひ王(ピリッポス)及び王の祖先は我々希臘人と血族上宗教上密接なる關係にある。²²⁾ 故に、願くは君その武力と富とをもつて立ち、希臘諸都市を糾合してその盟主となり、ペルシア遠征の總司令となられんことを」と。

抑々希臘の國家體系内に於ける一優位的權力の意味を含まして用ひるヘゲモニーなる語はそれ自身軍隊統卒權を意味し、隨つて一の官職的性質を有するものである。故にヘゲモニー所有者は同盟國の領内及び加盟國共同の戰に於ては該同盟のヘゲモニー施行の機關である。而して加盟國の自治が措定

されて居ることは無論である。²⁴⁾而してその權限は、同盟軍を集合する場所を指定する權、進軍・駐屯の時・場所を定むる權、等々凡そ軍事行動に關する一切のことを定むる權を含む。²⁵⁾但原則として動員する權利はない。²⁶⁾此處にヘゲモニーの性質に就いて詳述する違はないが要するにヘゲモニー所有者即ヘゲモーンは加盟國の國家的存在を措定し、加盟國相互の自由意志を認め、協定によつて作られた軍隊に對しての司令權を有する者である。イソクラテースのピリッポスに對して求めてゐるヘゲモーンも亦此限りの者であつたことは疑はれない。²⁷⁾併し乍ら當時既にケルソネス半島の諸都市、ブオーキス等を希臘世界より奪取しその帝國主義的政策を着々と實行しつゝあつたピリッポスに、盟主となり軍司令官となることを願ふ心は果して自己を絶對に自由なるものとする心であらうか。失はれた諸都市の恢復を叫ばずそのまゝに奪ひし者と妥協せんとするイソクラテースの主張は、事實上は、武力と富とにすぐれた新興マケドニア王國に奪はれし諸都市を犠牲にして僅かにその本國の存在をのみ顧念する敗戦國民の弱き心根の顯れと言はねばならない。ポーリスの存在を賭してポーリスの自由擁護の爲に玉碎したテーバイ市民の最後に比して、その精神を同日に論ずることは不可能であらう。イソクラテースに求められてゐるポーリスは唯現實の物質的苦惱から脱したるポーリスであつて、眞に傳統的ポーリスの自立精神に漲つたポーリスではなかつたのである。²⁸⁾ポーリスの傳統的自由確保の精神よりかくの如き背離こそ後に來るヘレニズム世界精神の前提と言はねばならない。而して傳統的自由確

保の精神よりの背離は常にイソクラテースやアイスキネース一派のみでない。その風潮が殆んど希臘人の上を蔽ふてゐたことは、飽く迄傳統的精神に立脚してポリリスの自由・自立を叫ぶデモステネースが義憤に燃えつゝ明示する所である。²⁹⁾我々はその一端を彼の對ピリッポス精神表明に際して、彼がなせる論述の中に見るであらう。

凡そデモステネースの諸作品のうち彼の對ピリッポス精神を最も明確に論示せるものは、前三五二年の *Philippika* (同名のもの三篇あるが故に之を第一ピリッピカと云ふ) 前三四四年の第二ピリッピカ前三四二年の第三ピリッピカ、及び前三四〇年にピリッポスがアテナイ市民に宛てた聲明書 *Ἐπιτολιχία φιλίππου* (Dem. XII) に對する彼の辯駁的演説 *προς τὴν ἐπιτολιχίαν τῆς φιλίππου* (Dem. XI) である。

デモステネースが第一ピリッピカを公にしたのはマケドニアの勢力が既にギリシア内部に浸潤しつゝあつた時である。即前三五八年アムピポリリスを占領し翌年ピドナを陥れてマケドニアの海上發展の根據地を獲得することゝなつたピリッポスは、アテナイがそれに臣屬せしエーゲ海の諸島と所謂同盟戰爭を起して、主としてその注意を東に向けてゐるに乘じ、テッサリアに進み、前三五二年にはテーバイと謀つて更に南進せんとしてテルモンピレーに向つた。然るに彼は——その事情を筆者は未だ詳にしないが——テルモンピレーを越えずして軍を返へした。アテナイ市民は之を知つて、ピリッポス恐るゝに足らずとなし、軍備を忽諸にし、その弛緩せる精神を更める所がなかつた。デモステネー

スは此情勢をみて祖國危しとし、ピリッポスの恐るべきを説き、人心の緊張奮起を促さんとして公にしたものが第一ピリッピカである。曰く、「ピリッポスを討つことの困難なるを覺れる人こそ正しい認識者である。かくの如き人々は思ひ浮べよ、我々が曾てはピドナ、ポタイダイア、メトーネ及びその附近の地全體を掌握せしことを」「アテナイ市民諸君、我々はピリッポスを撃破するに足る常備軍を備へねばならぬ。併し乍ら一萬二萬の傭兵ありともそれは紙兵士に過ぎない。我々に必要なるは決して大軍ではない。そは又物資少き我々にとつて不可能なことでもある。我々に必要なるは二千の歩兵、五百の騎兵、若干の貨物船、五十艘の軍艦、十艘の輕快船である。而して予は切に望む、少くも歩兵は五〇〇人、騎兵は五〇騎之を諸君自らが充されんことを。而して見よ、諸君の選出する軍の監部、即ち一〇人の Taxiarchoi、一〇人の Strategoi、二人の Hipparchoi は何をなすや。彼等は戰の爲の監部ではなくして市場アゴラを飾る粘土人形に非ずや」⁸¹⁾「今やピリッポスは病床にある(筆者曰く、曩にピリッポスがテルモムピレーより引返した理由の oneであるかも知れない)。併しよし今彼が死すとも、かくの如き諸君の有様變らざる限り、第二のピリッポスをつくる者は諸君自らである」⁸²⁾かくてデモステネースの眞に求めてやまぬものは、軍隊の如き有形の力はさることながら、それより寧ろそれを作る人の魂の覺醒、希臘傳統精神の復活であつたのである。

オリントスも既に陥落し(前三四八年)ケルソネソス半島全體に對するマケドニアの支配權確立し、

マケドニアの帝國主義の實積愈々あがるを知りつゝも、メツセニア Messenia 及びメガラ Megara がスパルタに對抗する爲マケドニアに親しみ、テーバイ、エウボエア、アツテイカのオロポス Oropos 等マケドニアの勢力下に立ち、アテナイに於てもマケドニアと協調せんとする者が大勢を支配するを歎じた第二ピリピカには曰く、「諸君、ポーリスを保護し防禦するものは城壁、陷鑿等種々あるであらう、併しそれは人によつて作られるものである。如何なる人をも、特に専制君主に拮抗せんとする自由國民を利する一般的防禦物は賢明なる人の魂である。諸君の要求してゐるものは何であるか、果してそれは自由であるか」と。

前三四二年ピリッポスの銳鋒東に向ひ、ビザンティオン Byzantion を攻略せとするの意あるを知つてビザンティオン救援の必要を説き、ピリッポスが希臘世界と協調政策をとれるは窮局に於て希臘の主となりその自由を奪はんとするものであると警告し、然るに希臘諸都市が之を覺らず、只管現實の安泰を望んで彼と協調せんとし、猜疑はむしろ之をポーリス相互に向けてゐるは徒らに彼に乗ずる隙を興へるものであると悲しみ、現在の希臘世界にとつての緊急事は、希臘のポーリス全體が同盟すると共にペルシアとも結び以て蠻人ピリッポスを討伐することであると叫んだ。——是第三ピリッピカの要である。デモステネースの精神が如何にイソクラテース並に一般希臘人のそれと相違し對立せしかは最早明であらう。

最後に尙考へらるべきはデモステネースが第三ピリッピカに於て求めてゐる希臘世界とペルシアとの結合に就いてある。事實アテナイガペルシアに接近しつゝあつたことはピリッポスの書簡に、

今や諸君は予を憎惡する餘り彼(筆者曰く、ペルシア王を指す)と防禦同盟を結ばんと謀つて居る
*nūn dē tosoûton ūmūn pēnīōsti toū pēpos êpē mīōous, ōste pēpos êkēivou diakēryōde pēnī tēs êrtimachias.*³⁵⁾

とあるによつて明である。而してこの企畫にデモステネースが參畫して居たであらうことも第三ピリッピカに於ける彼の主張と照し疑ない所である。而して此處に企圖せられたペルシアとの結合は、インクラテースがピリッポスに對してヘゲモンたらんことを要請し、事實上ピリッポスの帝國主義の前に屈服したるとは異り、ペルシアと對等の地位に立つて同盟しピリッポスの進出に對する防禦的共同戦線をしかなとする意の上に考へられて居るのである。此ことはデモステネースが前記『ピリッポスの書簡』に對してなせる演説の中に、

且——このことは可成重大なることであるが——最近アジアのサトラブ等は一隊の傭兵を派遣してピリッポスのペリントス奪取を妨止した。これ今や彼等(筆者曰く、ピリッポスとペルシア軍の意)の間に敵意が生じ、且危険が目睫に迫つたからである。もしビザンティオンが彼(ピリッポス)に占領されんか、彼等(サトラブ等)は甞に進んで戦に加はるのみならず、又ペルシア王を動かして我々に軍資金を送り我々を助勢せしめるであらう。

ἔτι τοῖον (ὁδὲ γὰρ τοῦτ' ἔστι μακρόν) ἀ κατὰ τὴν Ἰωνίαν συμπύκναι καθεστῶτες ἕναρχος μεν ἔθους
 [μυθολογίας] εἰστέμνατες ἐκώλυον ἐκρολοποιεθῆναι πέλοθου, νῦν δὲ τῆς ἔχθρας αὐτοῖς ἐνεστῶσιν
 καὶ τοῖ κινδύνου πλῆθει ὄντος, εἰ χειρωθήσεται Βυζάντιον, οὐ μόνον αὐτοὶ προθύμας συμπροληψήσονται,
 ἀλλὰ καὶ Βασιλέα [Περσῶν] Χρημάτα χορηγεῖν ἡμῶν πορτρέψονται, κτλ.

とあるをみても明である。

デモステネースの目標は決して如何なる形に於ても他國の下に立たず、希臘各ポリスの絶對的自
 由の確保にあつた。此彼の眼底に撮ずる各ポリス市民は、右の如きデモステネースの種々なる主張
 に見られる如く、自由精神・愛國心を失ひ祖國の危機に直面して尙軍務に服するをいとふ心の所有者
 であつたのである。されば彼は第三ピリッピカの中に「ピリッポスは未だ我等の國家を征服せずと雖
 も、諸君の輕佻浮薄なる精神に打勝てり³⁶⁾」と斷言したのである。

イソクラテースの觀る對象もデモステネースのそれもひとしく崩れ行く希臘のポリスの姿であつ
 た。併し前者の眼に映ずるは主として物質的原因によつて崩れ行く希臘世界であり、後者にあつては
 主として消え行く希臘精神であつた。此相違は勿論見られた世界そのもの、相違ではなく見た者の心
 眼の相違である。見られた世界そのものは一の衰萎して行くポリスの姿そのものである。

要是、ポリリスとポリリスとの對立抗爭、ポリリス内部の經濟的政治的對立の激化、それより來た

ポーリスの衰微、ポーリスの傳統的精神よりの離叛等の現象によつて意義づけられる前四世紀の希臘世界は、當時の希臘人の意識すると否とに拘らず、次に來るアレクサンドロスによるヘレニズム世界文化世界成立の前提であつたのである。(未完)

(註)

- (1) Demosthenes, *XXI. xarra Néōou*, 224.
- (2) Dem. *XXIV. xarra Thyagátou*, 37.
- (3) Schäfer, Demosthenes III, Leipzig 1885, S. 524.
- (4) J. Kaerst, Alexander der Grosse und der Hellenismus (Hist. Zeitschrift LXXIV) S. 4f.
- (5) Schäfer, a. a. O. S. 524, 526.
- (6) Aischynes, On the Embassy, esp. §. 178.
- (7) Aischyn, Against Kleisipho, 17.
- (8) *ibid.*, 160.
- (9) Diod. XVII. 3.
- (10) Justin. IX. 48. Plut., Demosth., 20.
- (11) Diod. XVII, 13.
- (12) Pseud Gallicthenes (in Müller, F. H. G.) Lib. I, 27.
- (13) Isokr. Philipp, 6, 36, 37, Paneg., 47.
- (14) Paneg., 47. Xenophon. V. I, 31.

Diod., XIV, 110, 3, 4.

前三八八年スバルタの Nearchos たる Antalkidas がヘルシアの Artaxerxes II. Mnemon と同盟し、三八七年アテナイと戦つて之を破り、平和條約を結ばしめた。此條約をアンタルキダス平和條約と云ふ。此條約の内容はヘルシア王によつて起草され、それがサルデスに派遣されしギリシア使節に渡されたのである。

條約内容は

一、小亞の陸地はクラッソメナイ Klazomenai 及びキプロス Kypros 島と共にヘルシア領とす。

二、ヘルシア支配下に非ざるギリシア諸都市は盡く自由にして獨立すべし。但し、レムノス、イムプロス、キプロスは元の如くアテナイ領たるべし。

三、此平和條約の執行者及び保證人はヘルシア王及び此條約文に署名せる者なり。

(15) Isokr., Philipp. 41.

(16) Isokr., ibid. 42.

(17) Isokr., ibid. 87.

(18) Isokr., Paneg. 44.

(19) Isokr. Philipp. 11, 15.

(20) Isokr. ibid. 15.

(21) Isokr., ibid. 6.

(22) Isokr., ibid. 12, 45, 46, 47.

(23) Isokr., ibid. 6.

(24) Kahrsiedt, Griechische Staatsrecht. I. Göttingen. 1922. S. 84.

(25) Kahrsiedt, a. a. O. S. 183. *ἡγεμονία* の概念の歴史的變化については Schüfer, Staatsform und Politik. Leipzig 1932. S.

177F. 參照

- (26) Kahstedt, a. a. O. S. 185.
(27) Isokr., Panathenaios 143.
(28) 彼とつゞくラメの協調はホーリスとホーリスとの抗争から來る疲弊から逃れる爲に必要であり (Philipp. 15), ヘルシア遠征もそれにちつて名譽・富・領土等を獲得すべしと云ふ現實觀念の上に説かれて居る (Philipp. 37).
(29) Demosth., Philipp. II. 15, 50, 21, 23, 26, Philipp. III, 56, 57, 59.
(30) Philipp. I, 4.
(31) Philipp. I, 16, 19, 21, 22, 23, 26.
(32) Philipp. I. II.
(33) Philipp. II, 14, 26, 28.
(34) Philipp. II. 23, 24.
(35) Demosth. XII. (Πρωτοδία Φιλίππου) 7.
(36) Demosth. XI. (Δεύτερη ἐπιτομή Φιλίππου) 5, 6.

(一九三三・九・一四)